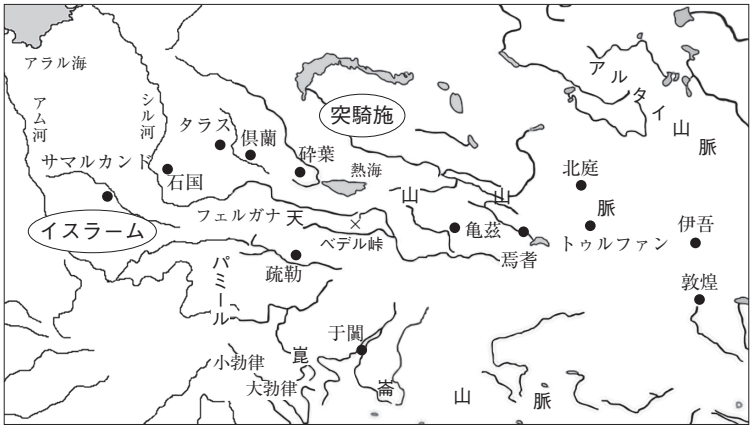
タラス河畔の戦いと砕葉——唐の出兵目的をめぐって——

齊藤茂雄

はじめに

七五一年に発生したタラス河畔の戦いは、西方から中央アジアへと進出していたイスラーム勢力のアッバース朝と、東方から中央アジアへと進出していた中国の唐朝とが衝突した戦闘として良く知られている。Barthold［1928, pp. 195–196］は、中国とイスラーム勢力とどちらの勢力がマーワラーアンナフルを影響下に置くかを決定した戦いであり、唐は敗北により中央アジアから後退したと指摘して、その重要性を強調する。同様に、東西勢力の中央アジアにおける趨勢を決定付け、唐が撤退する原因となったとする研究として、Gibb［1923, p. 96］や護［一九七六、一五四—一五九頁］などがある。近年でもKarev［2015, pp. 62–78］がこの観点から両者の戦いを再考しており（特にpp. 77–78）、根強く継承されている。畢波［二〇〇七、二四頁］もタラス河畔の戦いで唐とイスラーム勢力の対立が表面化した、と評している。

一方で、前嶋［一九八二a、一〇四頁］は、唐とイスラーム勢力との勢力圏がたまたま接触していたために戦闘が起こったにすぎないとその偶発性を指摘している。森安［二〇一五（一九八四）、一八二—一八三頁］もまた、唐軍はタ



【図一】　タラス河畔の戦い前後の中央アジア略図

ラス河畔の戦いの二年後にバルチスタン（大勃律）まで遠征を行うなど士気は高く、西域の権益を失ってもいないことから、両者の戦いが中央アジアの天王山と呼べるような重要なものではなかったと指摘する。近年では、李方［二〇〇六、五九頁］がタラス河畔の戦いの偶発性を認めつつ、東西両勢力の拡大の中、衝突は必然であったと指摘しており、前嶋の視点を継承しつつも、東西両勢力の衝突に注目している。

このように、タラス河畔の戦いは、著名であるにもかかわらずその評価は定まっていない。この戦いが中央アジア史の命運を分けた重要な戦いであったのか、それとも単なる偶発的な衝突であったのか、その答えを出すためには当事者である両軍の出兵の経緯を分析して、その出兵の目的を解明していくしかないだろう。とはいえ、戦闘そのものに関する伝世史料は中国史料でもイスラーム史料でも驚くほど少ないため、従来知られている史料だけで新たな歴史事実を解明することは難しい。(1) そこで本稿では、タラス河畔の戦いに関する漢語新出史料を用いて、唐側の出兵目的を再検討してみたい。

その作業を通じて、タラス河畔の戦いが持つ歴史的背景を明らかにすることが、最終的な目標となる。

第一章　タラス河畔の戦いと中央アジア史の展開

第一節　東西両勢力の展開

タラス河畔の戦いにおける東方の主役である唐は、六三〇年代から大規模な西方拡大を開始した。六三〇（貞観四）年に伊吾（ハミ）オアシスに侵攻したのを皮切りに六三九（貞観十三）年にはトゥルファンオアシス、六四八（貞観二十二）年に亀茲（クチャ）オアシスを制圧して安西都護府を置くことに成功する。そして、同時に亀茲・疏勒（カシュガル）・于闐（コータン）・砕葉（スイアブ）／焉耆（カラシャール）に安西四鎮を設置して支配の拠点とした。[2] 砕葉鎮城は、キルギス共和国のアク・ベシム遺跡がこれにあたり、現在でも唐が建設した城郭跡が現存している。トルコ系遊牧勢力の突騎施（テュルギシュ）Türgišが台頭したことによって、砕葉は七一七（開元五）年に完全に唐の支配を離れ、安西四鎮には代わりに焉耆が入ることとなった。[3]

一方、西方の主役であるイスラーム勢力（大食）[4] の本格的な中央アジア進出は、クタイバ・イブン・ムスリムが七〇四年にホラーサーンの総督となったことから始まる。クタイバは七〇六年以降ソグディアナにも遠征を行い、七一二年にサマルカンドを征服するなど支配地域を広げていった。イスラーム勢力は、七二九・七三四年にはソグディアナやその周辺で大規模な反乱が起きて一時的に退却を余儀なくされつつも、七三九年には再び石国（チャーチ、現タシュケント）まで進攻している。そして、タラス河畔の戦い前夜であるウマイヤ朝末期の時点では、サマルカンドからシル河以南のウストルシャナとの間で支配地域が揺れ動いていたようである。[5]

第二節　突騎施の展開

もうひとつ、直接タラス河畔の戦いに参加したわけではないが、重要な存在だったのが上述した突騎施で、突騎施は、突厥の西半部である西突厥の一部族であった。西突厥は六世紀後半から、周辺のオアシス都市との共生関係を足がかりに勢力を拡大したが、七世紀半ば以降、唐や、チベット高原の吐蕃がタリム盆地方面に進出してくると衰退していき、西突厥を構成する一〇部族（十姓・十箭・オン＝オクOn Oq）が阿史那氏の正統王家から自立していく［内藤一九八八、第二章］。

突騎施はこの一〇部族のひとつであったが、東突厥（突厥第二可汗国）の侵攻に対抗できなかった西突厥可汗の阿史那斛瑟羅に代わって、六九〇年代から烏質勒のもとで強勢化し、七〇八年には娑葛が可汗として即位することで突騎施王国が成立した［内藤一九八八、三五一頁］。しかし、娑葛がさらなる東突厥の侵攻を防ぎきれなかったため、傍系である黒姓突騎施の首長であった蘇禄が台頭する。蘇禄は、娑葛が東突厥に殺害された後に突騎施を糾合し、開元三（七一五）年頃には可汗を自称したとされる［内藤一九八八、一八頁、注二八］。これ以降、正統の黄姓突騎施と、傍系の黒姓突騎施が対立し合うこととなった。

蘇禄は、砕葉北方の山中を中心地としつつ中央アジアに進出することを企図して、同じく中央アジア支配の確立を目指すイスラーム勢力と対立し、七二〇年代には複数回中央アジア遠征を行っている［前嶋一九八二a、七六―七九頁］。この突騎施によるイスラーム勢力進出の阻止には、派兵の手間が省ける唐も支持に回り、七二七（開元十五）

年には正式に唐が対イスラーム勢力戦を委任している［『冊府元亀』巻九九九「外臣部 請求」（明版、一一七二三頁／宋版、四〇四〇―四〇四一頁／cf.前嶋一九八二a、七六頁］。また、唐は七一九（開元七）年に蘇禄を忠順可汗に冊立したほか［『冊府元亀』巻九六四「外臣部 封冊二」（明版、一一三四三頁）］、七二二（開元十）年には西突厥王族である阿史那懐道の娘を交河公主として出嫁しており［石川二〇一三、三二―三三頁］、蘇禄との関係構築に努めている。さらに、蘇禄は東突厥・吐蕃とも婚姻を結んでおり［『旧唐書』巻一九四下「西突厥伝」（五一九二頁）］、中央アジアで地位を確立したのである。

ところが、晩年の蘇禄は配下からの信頼を失っていたといい［『旧唐書』巻一九四下「西突厥伝」（五一九二頁）］、七三八年に黄姓突騎施の莫賀達干（バガ＝タルカン）によって殺害された［前嶋一九八二a、八二―八三頁］。すると、突騎施は黄姓・黒姓両者ともに可汗を立て、対立が深まることとなった。これ以降、突騎施は衰退にいたるとされている。そのような折に、唐によるタラス遠征が行われたのであった。

第三節　タラス河畔の戦い

タラス河畔の戦いにつながる七五一年の高仙芝の遠征は、前年の石国遠征と一連のものだった。

【史料一】『旧唐書』巻一〇九「李嗣業伝」［三二九八頁］

（天宝）十載（七五一）、さらに石国を平定するのに従い、九姓ソグド人と（唐に）背いた突騎施を破るに及んで、（李嗣業に）跳盪功によって特進を加え、本官と兼ねさせた。当初、高仙芝が石国王をだまして友好関係を結ぼ

うと約束したが、その後、兵を派遣して攻撃し石国を破り、その老人弱者を殺害し、その強壮な者を捕虜として、金宝・緑色の珠玉・駱駝や馬などを鹵獲したので、石国の人々は号泣した。そして（高仙芝は）石国王を捕らえ、東方に連れ去って彼を宮中に献上した。(6)

この事件は七五一年のものとされているが、実際に石国王を献上したのが、『資治通鑑』［巻二一六「玄宗天宝十載（七五一）正月条」（六九〇四頁）］に、「安西節度使の高仙芝が入朝して、捕らえた突騎施可汗・吐蕃の酋長・石国王・朅師（チトラル）(7)王を献上した（安西節度使高仙芝入朝、獻所擒突騎施可汗・吐蕃酋長・石國王・朅師王）」とあるように七五一年正月のことなので、遠征を行ったのは当然七五〇（天宝九）年中である。

さらに、この事件については天宝十載二月十二日の日付を持つ「張無價告身」［73TAM506:05/1／『吐文』四、三九二―三九四頁］五行目に、「安西四鎮が石国を平定し、ソグド人と（唐に）背いた突騎施といった賊を破るに及んで（四鎮平石國、及破九國胡并背叛突騎施等賊）」とあるのが、「李嗣業伝」の冒頭とほとんど同文で同じ遠征のことを指していると考えられる。「張無價告身」が長安で作成されるまでにかかる時間を考慮して、この遠征は天宝九載（七五〇）晩夏から初秋に決行されたとされる［銭伯泉一九九一、五三―五四頁］。

この高仙芝の遠征の結果、石国王は捕縛され、長安で処刑される［『新唐書』巻二二一下「西域伝下」（六二四六頁）］。しかし、王族の中で逃れた者がいた。ここから先は直接タラス河畔の戦いに直接つながるので、『資治通鑑』の記述を見てみたい。

【史料二】『資治通鑑』巻二一六「天宝十載夏条」［六九〇七―六九〇八頁］※胡注省略

高仙芝が石国王を捕縛すると、石国の王子がソグド諸国に逃れ、高仙芝がだまして欲望のままに暴れまわった様子をことごとく報告した。ソグド人たちはみな怒り、内密にイスラーム勢力を引き入れて共同で安西四鎮を攻めようとした。高仙芝はこれを聞いて、非漢人兵・漢人兵三万人を率いてイスラーム勢力を攻撃したところ、〔『資治通鑑考異』は次のように言う。馬宇の『段秀実別伝』には「非漢人・漢人六万人」というが、今は『唐暦』の記述に従う。〕七〇〇里以上深入りしてタラス城にいたり、イスラーム勢力と遭遇した。五日間交戦したが、葛邏禄（カルルク）の人々が反乱して、イスラーム勢力とともに唐軍を挟撃したので、高仙芝は大敗し、兵士はほとんど死亡して、わずか数千人となってしまった。(8)

『資治通鑑』の成立自体は周知のように一一世紀とかなり時代が降る。しかし、『考異』で引用されている『段秀実別伝』は、『新唐書』［巻五八「藝文二」（一四八四頁）］には、「馬宇『段公別伝』二巻。（段公とは段）秀実。馬宇は元和年間の秘書少監・史館修撰だった。（馬宇『段公別傳』二巻。秀實。宇、元和秘書少監・史館脩撰。）」とあって、元和年間（八〇六―八二〇）に成立した史書である。また、『唐暦』も代宗期（七六二―七七九）に成立した史書であることが知られており［郝潤華二〇〇一］、同時代性が高い。これらの現在見ることができない同時代史料を参照できているため、『資治通鑑』の当該記事は信憑性が高いと判断したい。

この記述によれば、前年の高仙芝の攻撃によって石国王が捕らえられたが、詳細不明の「石國王子」が逃れてイスラーム勢力に助けを求め、タリム盆地の唐の拠点を攻撃しようとしたため、高仙芝が出兵したのだとされる。(9) タラスは、七五一年の高仙芝出兵前にイスラーム勢力によって占領されたようである［Karev 2015, pp. 69–70］。最終的に

高仙芝とイスラーム勢力がタラス付近で交戦したが、トルコ系遊牧民のカルルクが寝返ったため、唐軍が敗れたという。[10]

このように、タラス河畔の戦いは七五〇年の高仙芝による石国遠征が直接の原因であった。では、なぜこの遠征は行われたのか。Dunlop［1964, pp. 326–327］は、一三世紀に著されたIbn al-Athīrの『完全な歴史』*al-Kāmil fit-Tārīkh*の一節を引用し、フェルガナが唐に派兵を求めた結果、石国攻撃が実現したという見通しを立てた。一方、前嶋［一九八二a、九五、九八―九九頁］は、フェルガナと石国との対立について触れた上で、それが唐の遠征の直接原因と見なすのは困難とする。前嶋は、石国が当時唐と敵対していた黄姓突騎施と友好関係にあったことを指摘して、石国が唐の西突厥統治を妨害したことが派兵の原因であると推測する。

前嶋が石国と黄姓突騎施との友好関係を指摘したことは極めて重要だが、派兵の原因となったとされる西突厥統治の妨害とは具体的に何を指すのかはっきりしない。唐が黄姓突騎施と友好関係にある石国を煙たく感じていたということは大いにあり得るが、派兵には大義名分が必要であろう。そこにフェルガナから唐に対して、対立する石国に対する派兵要請が出され、これ幸いと利用して出兵した、というのが実態に近いのではなかろうか。

さて、タラス河畔の戦いと大いに関わる記述に、この戦いに従軍して捕虜となった杜環の体験記がある。杜環は『通典』編者の杜佑の族人で、捕虜となった後にクーファ、バスラを経由して宝応初年（七六二年頃）に帰国した人物である［前嶋一九八二b、六二―六三頁］。長文だが、行論の都合上、関係箇所を全文引用する。なお、傍線は筆者

が付したものである。

【史料三】『通典』巻一九三「辺防九 石国条」［五二七五―五二七六頁］

杜環の『経行記』には次のようにある。「その（石国の）国都は赭支（チャーチ）といい、大宛ともいう。天宝中に、鎮西節度使の高仙芝がその王と妻子を捕縛して長安に帰還した。国の中には二本の河川があり、一本は真珠河（＝インチュ河、シル河のこと）であり、一本は質河（＝シル河の支流Čirčik河［桑山（編）一九九八、一七二―一七三頁、吉田豊担当「縛叉大河」］）であり、ともに西北に流れている。土地は平坦で果実が多く、良質な犬・馬を産出する。」さらに次のようにある。「砕葉国。（a）安西（＝クチャ）より西北方に千里あまりに勃達嶺（＝ベデル峠）があり、峠の南側が唐（領域）の北限であり、峠の北側が突騎施（領域）の南限である。西南方に葱嶺[11]まで二千里あまりである。その水でベデル峠から南流するものはすべて中国を通り、東海に達する。ベデル峠より北流するものはすべてソグドの境域を経て北海に注ぐ。（ベデル峠より）北に数日行くと、雪海をわたる。その海（＝湖）は山中にあって、春も夏もいつも雪が降るので、雪海というのである。なかに細道があり、道のそばには水の穴が空いている場所がよくあって、穴の深さは一万仞で、転落した者がどこへ行ったか分からない。ベデル峠の北に千里あまり行くと砕葉川（＝チュー平原）につく。その平原の東端に熱海（イシククル）があり、この地は寒いのに凍らないので、熱海というのである。さらに砕葉城（アク・ベシム遺跡）があり、天宝七（七四八）年に北庭節度使の王正見が侵攻したので、城壁は破壊し尽くされ、集落は衰退した。かつて交河公主が留めおかれていた所には、大雲寺が建てられており、現存している。その平原の西側は石国（＝チャーチ）に接しており、

（平原の）おおよその長さは千里あまりである。（b）平原のなかには異姓部落があり、異姓突厥（黄姓・黒姓突騎施のこと［前島一九八二a、九三頁］）がいて、それぞれ兵馬数万を保有している。城塞は錯綜しており、日常的に戦闘が行われているので、農民はみな甲冑を着て、ひたすらにお互い略奪し合い、奴婢としている。（c）その平原の西端に城郭都市があって、名はタラスといい、石国人の駐屯地であり、天宝十（七五一）年に高仙芝が敗れた地である。ここから西海まで、三月から九月には空に雲も雨もなく、みな雪解け水を使って耕作している。大麦・小麦・稲・エンドウ・畢豆（不明）に適している。葡萄酒・にごり酒・酸乳を飲む。[12]」

この記述は非常に豊富な情報を含んでおり、高仙芝がタラスで敗れたことも当然記されているが、目を引くのは、砕葉に至る道のりならびに砕葉城を含むチュー平原周辺の情報の詳しさである。というより、タラス河畔の戦いについては、ほんのおまけ程度にしか記述が無い。これは、タラス河畔の戦いで捕虜になった人物の記録としては、よくよく考えれば奇妙であるが、このことの意味をきちんと考察した研究はない。

そこで、章を改めて、なぜ杜環が砕葉にそれほど注目しているのか、という問題を二点の新出史料から考察し、高仙芝は当初、どこを目指して出兵したのかを検討したい。

第二章　二件の新出史料

①【史料四】唐天宝十載（七五一）七月交河郡長行坊牒為補充闕人事（2006TZJI:026）

本史料は、二〇〇〇年代に発見ないし公表された、いわゆる「新獲トゥルファン文書」の一部である［『新獲』、三

四四頁]。本文書は、その中でもいわゆる「徵集文書」であり、詳しい発見地は不明で、二〇〇六年に個人の寄贈によってその存在が明らかとなった。まずは、録文と和訳を提示する（［ は以下欠を示す）。写真は元となった『新獲』[三四四頁]の図版を参照のこと。

【録文】

（前欠）

一　礌□□（石）（館）［

二　牒。獻芝共張秀瓌同捉［

三　天威健兒赴碎葉、准　［

四　徭役一切令放免、獻□（芝）［

五　館郎闕人、伏望准格　［

六　天寶十載七月［

七　「付司。［

（中欠）

八　「檢責仙［

（後欠）

【和訳】

〔……より、……へ〕

一　礌石館[13]の……の事について

二　申し上げます。（許）献芝[14]は張秀瓌とともに、……

三　天威健児[15]が碎葉に行きましたので、〔ご命令に〕従って、……

四　揺役の一切はみな免除させ、献芝は、……

五　（礌石）館については人員を欠いており、付してお願いいたしますには、格に従い、……

六　天宝十載（七五一）七月□日〔……が申し上げます。〕

七　「担当部局に回付せよ。〔……が指示する。〕」

（中欠）

八　「検査した。仙。」

本文書の内容は、断片的であるため全体を把握することは困難であるが、少なくとも、事書にある礌石館というトゥルファンにあった客館において、天威健児出兵に関わる労役の減免について指示を仰いだものと考えられる。

問題となるのは、「天威健兒赴碎葉（天威健児が碎葉に行きましたので）」という文言と、天宝十載（七五一）七月という発出時期である。この文書を最初に検討した畢波〔二〇〇七、二八―三〇頁〕は、高仙芝は、七五一（天宝十）年正月に入朝した後、四月に兵を率いて長安を出発し、六月頃には西州交河郡の赤亭鎮に兵を集結させていて、本文書の日付である七月と整合することから、この文書は高仙芝の遠征軍と関わるものであると指摘する。すなわち、

本文書は、タラス河畔の戦いに向かった高仙芝遠征軍がトゥルファンを出発した後に出されたものと考えて矛盾無く、「天威健兒赴碎葉」という文言は、高仙芝遠征軍と連動する出兵について述べていると考えている。筆者もここまでは同意できる。しかし畢波は、天威健児は、イスラーム勢力と突騎施が連携して唐軍を背後から攻撃することを恐れた高仙芝によって、タラス遠征軍とは別に碎葉に派遣された別動隊であると考えている。果たしてそのように考えるべきなのだろうか。次に、畢波氏が引用していない別の史料を紹介して考察したい。

②【史料五】郭曜墓誌

本墓誌は、鄭旭東［二〇一九］によって録文・拓本写真ともに初めて紹介された。その九行目には「公汾陽之長子也（郭曜は「汾陽」の長男である）」という記載があり、「汾陽」とは汾陽郡王・郭子儀のことであることから、八世紀後半に絶大な権力を握った郭子儀の長男の墓誌であることが分かる。[16] また、墓誌の二六行目には、建中四（七八三）年五月二十六日に墓誌とともに郭曜が埋葬されたことが記されていて、本墓誌は、タラス河畔の戦いから約三〇年後に作られた同時代性の高い史料であることがわかる。そして、この墓誌で注目すべきは、一〇―一一行目にある以下の文章である。

天宝の初め（七四二年）頃に、将軍である張大賓や高仙芝がみな官職を授けて（郭曜を）先鋒としたところ、従軍して斬啜や突騎施を破り、勃律や碎葉を切り開いた。[17]

この記述から、郭曜は張大賓[18]や高仙芝といった将軍のもとで軍務に携わっていたことが分かる。高仙芝は、本人の

列伝［『旧唐書』巻一〇四］によれば、開元末に安西副都護・四鎮都知兵馬使であり、七四七（天宝六）年に四鎮（安西）節度使[19]になっている。

遠征先としては、墓誌には斬啜[20]・勃律・突騎施・碎葉が挙げられている。勃律は、七四七（天宝六）年に高仙芝が行った小勃律討伐がこれに該当する。森安［二〇一五、一七八―一八〇頁］によれば、小勃律とは、南パミールのギルギットのことであり、七三七年に吐蕃の支配下に入った後、唐は三度ギルギット討伐を企図したが失敗したため、高仙芝にその経略を託したとされる。その結果、高仙芝は小勃律国内の親吐蕃派を斬り、国王夫妻を捕らえる大勝利を収めたのである。

続いて、突騎施について見ると、やはり高仙芝による討伐がこれに当たる。既に挙げた史料である『資治通鑑』［巻二一六「玄宗天宝十載（七五一）正月条」（六九〇四頁）］に、「安西節度使高仙芝入朝、獻所擒突騎施可汗・吐蕃酋長・石國王・朅師王。加仙芝開府儀同三司」とあるなかに、突騎施可汗を捕縛したことが記される。

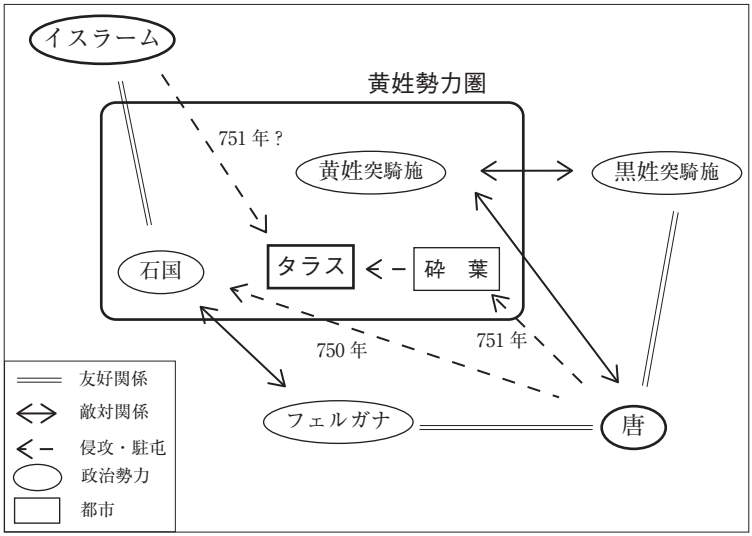
この事件は、これも既に提示した「張無價告身」五行目の「四鎮平石國、及破九國胡幷背叛突騎施等賊」とある天宝九載（七五〇）夏末から初秋に行われた遠征に当たる［銭伯泉一九九一、五三―五四頁］。この時に捕縛された突騎施可汗については、前嶋［一九八二a、九五頁］が、当時、唐と敵対していた黄姓突騎施の可汗であると推測しているが、至当であろう。

【史料五】の最後には碎葉遠征について記されているが、これがいつのことなのか、従来知られていた典籍史料からは明らかにならない。この墓誌を初めて紹介した鄭旭東［二〇一九、六〇頁］は七五〇年と七五一年、両方の可能

性があると述べる。確かに、墓誌原文で「勃律・碎葉」と並んでいるのであるから、七四七年の勃律討伐の後に行われたと考えるべきだろう。それならば、先に挙げた七五〇年の石国討伐であろうか。この遠征では上述したように突騎施可汗を捕らえており、蘇禄の頃に突騎施可汗の中心地は碎葉周辺にあったと考えられている［内藤一九八八、一〇―二一頁］ことから、七五〇年の突騎施可汗は碎葉で捕縛された可能性はある。しかし、石国遠征にせよ、碎葉遠征にせよ、他の史料には残らない王正見による遠征を含めてこまめに情報を残してくれている『経行記』が、七五〇年の碎葉遠征を記録していないのは奇妙である。このことは七五〇年の遠征が碎葉に行かなかったこと、突騎施可汗がほかの場所で捕まった可能性を示唆する。すると、この「郭曜墓誌」が記録する碎葉遠征とは、七五一年の遠征のこととしか考えられないのである。

以上のように、【史料四】・【史料五】の新出同時代史料の記述から、タラス河畔の戦いを引き起こす高仙芝の遠征軍は、碎葉遠征軍であったと当時認識されていたことが明らかとなった。とすると、次に湧いてくる大きな疑問は、石国王子の背反に対して行われたはずの遠征の目的地が、なぜ石国ではなく碎葉とされているのか、ということである。

上述したように、【史料四】を検討した畢波［二〇〇七、二九頁］は、対イスラーム勢力戦のために送った部隊とは別に、別動隊が碎葉を抑えるために出兵したと推測し、この疑問に答えようとした。しかし、タラス河畔の戦いに参加した杜環も碎葉のことを報告している以上、別動隊ではなく本隊が碎葉を通過したはずである。道程としても、碎葉とタラスは同一経路上にあるため、わざわざ別動隊を派遣する必要はない。畢波は、唐の軍隊はあくまでイス



【図二】「タラス河畔の戦い」関連中央アジア勢力図

ラーム勢力と戦うために出兵したという前提から出発したために、別動隊という見解になったものと思われるが、そう解釈する必要はない。そうではなく、【史料四】は高仙芝の遠征軍そのものについて述べていると見なすべきなのである。さらには、【史料五】でも高仙芝が碎葉に遠征したと記されていることから、素直に高仙芝の軍隊の目的地は碎葉だったと考えるべきである。それゆえ、本稿では、これ以後、七五一年の高仙芝の遠征を「碎葉遠征」と呼称する。ここまでの情報を総合して、七五〇～七五一年の中央アジア情勢を図化したものが、【図二】である。

では、高仙芝遠征軍はなぜ碎葉を目指し、なぜその目的地と反してタラスで敗戦することとなったのだろうか。この疑問に答えるために、蘇禄死後の突騎施の展開と碎葉遠征について考察してみたい。

第三章　両姓突騎施の対立と砕葉遠征

第一節　黒姓・黄姓突騎施の対立と唐の介入

第一章で見たように、黒姓突騎施の蘇禄が七三八年に黄姓の莫賀達干（バガ＝タルカン）によって殺害されると、突騎施では黄姓・黒姓両者の対立が顕在化することとなった。すると、黒姓・蘇禄と友好関係を築いていたはずの唐は黄姓支持にまわり、翌七三九年にはついに大規模な遠征軍をチュー平原へと送ったのである。その記述を見てみよう。

【史料六】『新唐書』巻二一五下「突厥伝下」［六〇六八頁］

都摩支はさらに（莫賀）達干に背き、蘇禄の息子の吐火仙骨啜を可汗として即位させて、砕葉城に住まわせ、黒姓可汗の爾微特勒（テギン）を招いてタラス城を保持し、共同で達干を攻撃した。皇帝（玄宗）は磧西節度使の蓋嘉運に突騎施やフェルガナ西方の諸国を慰撫させた。莫賀達干は蓋嘉運とともに石国王の莫賀咄吐屯（バガトゥル＝トドン）や史国王の斯謹提を引き連れて共同で蘇禄の息子を攻撃し、彼を砕葉城で撃破した。吐火仙は軍旗を捨てて逃走したが、彼とその弟の葉護頓阿波（ヤブグトン＝アバ）を捕虜とした。疏勒鎮守使の夫蒙霊詧は精衛兵を率いて、フェルガナ王とともにタラス城を襲撃し、黒姓可汗とその弟である撥斯とを斬殺し、曳建城に入って、交河公主ならびに蘇禄の可敦・爾微の可敦を捕らえて帰還した。さらに、西方諸国の散り散りになった数万人を管理して、全員をフェルガナ王に与えた。諸国はみな帰順してきた。[21]

現在のアク・ベシム遺跡である砕葉城には、黒姓の蘇禄の子、吐火仙がおり、タラス城には黒姓可汗の爾微特勒（テギン）が

いた。上述した【史料三】では、タラス城までがチュー平原の一部と見なされていた。この七三九年の遠征時点では、チュー平原の中心地である碎葉城と西端のタラス城が黒姓の勢力下にあったのである。しかし、この遠征で唐は吐火仙を捕らえ黒姓可汗を殺害することで、黒姓突騎施に壊滅的な打撃を与えたのであった。

唐の支持を得た黄姓が莫賀達干のもと再び勢力を拡大すると、すぐに唐との間に軋轢を生じることとなった。唐が七四二（天宝元）年に旧西突厥諸部を統治させるために長安から送り込んだ傀儡の十姓可汗阿史那昕を、莫賀達干が碎葉の西、タラスの東にあった倶蘭城で殺害するにいたったのである［『資治通鑑』巻二一五「天宝元年四月条」（六八五四頁）］。

阿史那昕と莫賀達干との対立に関しては、阿史那昕が唐によって十姓可汗に冊立されたことが背景にあるとする説［内藤一九八八、八九―九〇頁］がある。『資治通鑑』［巻二一四「開元二十八（七四〇）年三月甲寅条」（六八四一頁）］の記事に従い、七四〇年三月に阿史那昕が十姓可汗に冊立されたことに不満を持った莫賀達干が同年十一月に反乱を起こし、それが最終的に阿史那昕殺害へとつながるという説である。

ところが、七三三（開元二十一）年に作成された阿史那昕の父親である阿史那懐道の墓誌「大唐故特進十姓可汗濛池大都督上柱国阿史那（懐道）府君墓誌銘」［石川二〇一三］を見ると、一四行目に「息子がいて昕という。幼い頃から人情に篤くて鋭敏で、成長してからは群を抜いていたので、左領軍衛将軍として可汗を襲名した」[22]という記述がある。阿史那懐道が十姓可汗であったことは墓誌からも伝世史料からも明らかなので［cf. 内藤一九八八、七七―八一頁］、阿史那昕が襲名した「可汗」とは十姓可汗のことと考えられよう。阿史那懐道が死去したのは七二七（開元十

五）年［「阿史那懐道墓誌」二五―二六行目］であり、それから間もなく、少なくとも墓誌が作成された七三三年までには、阿史那昕は十姓可汗を継承したと考えられる。その後、長安に住まう傀儡可汗の阿史那昕から理由も無く可汗位を奪う必要もないので、彼はチュー河流域に送り込まれる七四二年まで、継続して十姓可汗であり続けた可能性が高いだろう。もし阿史那昕がそのまま殺害されるまで十姓可汗を帯び続けていたとすれば、莫賀達干が七四〇年に起こした反乱は阿史那昕の十姓可汗冊立とは無関係であり、単に唐軍が引き上げた直後から、莫賀達干が唐の統制に従わなくなったことを示すに過ぎないこととなる。その場合、黄姓突騎施には最初から唐に従うつもりなどなく、黒姓突騎施を唐が撃破した途端に手のひらを返し、反抗する名目として阿史那昕の可汗冊立を持ち出したものと思われる。もはや唐の勢力が絶対のものとは言えない当時にあっては、そのようなことが起こる可能性は十分にあったはずである。

そのような状況下で、唐は七四二年に阿史那昕を現地に送り込み、旧西突厥諸部を統率下に置こうとしたが失敗した。そこで唐は、同年に来貢してきた都摩支を三姓葉護（ヤブグ）に冊立した一方で、七四四（天宝三）年には黒姓の伊里底密施骨咄禄毗伽可汗（イルーイトミシュークトゥルグ＝ビルゲ）（黒姓可汗）を十姓可汗に冊立している。[23]

ところで、三姓葉護の「三姓」とは、ウイグル可汗国で九世紀初頭に作られたカラバルガスン碑文漢文版二一行目に、「十箭三姓突騎施」［森安／吉田二〇一九、二三頁］とあり、同ソグド語版二〇行目にも、「一〇の矢の三つのトゥルギシュ」［森安／吉田二〇一九、五〇頁、cf. Yoshida 2020, p. 67］とあるように、突騎施を構成する三部族[24]を指す表現と思われる。それゆえ、唐が都摩支に与えた「三姓葉護」とは、突騎施勢力の首長であることを認めるにすぎないも

のだったことが分かる。一方、黒姓可汗に与えた「十姓可汗」とは、突騎施を含む旧西突厥の一〇部族、すなわち西突厥全体の君主であることを認めるものであり、都摩支を上回る立場を与えることで黒姓支持をはっきり示すものだったと考えられる。唐が黒姓に痛手を与えたばかりに、今度は黄姓と対立せざるを得なくなったのである。

その結果、七四八（天宝七）年には北庭節度使の王正見により、突騎施の中心都市であった碎葉城への攻撃があり、七五〇（天宝九）年には、安西節度使の高仙芝が突騎施可汗を捕縛している。前嶋［一九八二a、九三―九六頁］は、この両遠征ともに黄姓に対する攻撃であろうと推測しているが、当然従うべき見解であろう。

以上のように、突騎施は蘇禄死後、黒姓が七三九年の唐の攻撃で衰える一方、黄姓が唐の軍事行動を利用して勢力を拡大し唐と対立するようになった。こうした情勢下で、七五〇年に黄姓と友好関係にある石国への遠征が行われ、翌年に高仙芝の碎葉遠征が始まったのであった。

第二節　碎葉遠征と突騎施

碎葉遠征に関わる記事としては、やはり【史料三】杜環『経行記』が一級史料である。そこで再びこれに注目してみると、傍線（a）「從安西西北千餘里有勃達嶺、嶺南是大唐北界、嶺北是突騎施南界」という記述が目に留まる。ベデル峠は天山越えの経路として著名であるが、その南方、つまりタリム盆地側は唐の勢力圏である一方、その北方、つまり天山北麓からイシククル方面は、突騎施の勢力圏であると記録しているのである。突騎施の勢力が極めて強かったらそもそも危険な天山越えの遠征自体行えないはずなので、突騎施の勢力が盤石だったとは考えに

くいが、それでも、唐の遠征軍は突騎施の勢力圏内を通る心積もりで進軍していたことをこの史料は示している。突騎施のうち唐と対立していたのは黄姓であり、黄姓は前年に高仙芝によって可汗が捕縛されたはずなのだが、高仙芝と彼の遠征軍は、彼らの勢力が衰えたとは見なしていなかったようである。

突騎施の存在感は、『経行記』のほかの記事からも見て取ることができ、碎葉川、すなわちチュー平原の記述では、傍線（b）「其川西接石國、約長千餘里。川中有異姓部落、有異姓突厥、各有兵馬數萬。城堡閒雜、日尋干戈、凡是農人皆擐甲冑、專相虜掠以爲奴婢」という記述がある。この記述から、もともと突騎施の中核地域だった碎葉を含むチュー平原では、黄姓と黒姓という対立する両勢力が入り乱れて争い合っていた状況が見える。抗争が続いていたことから、突騎施勢力も決して安定はしていなかったようだが、前年の高仙芝による黄姓可汗捕縛によって、唐が当時支持していた黒姓突騎施がチュー平原を制圧したわけではなく、黄姓も黒姓と均衡する勢力を保持していたのである。

さらに、高仙芝が敗れたタラスについては、傍線（c）「其川西頭有城、名曰怛羅斯、石國人鎮、卽天寶十年高仙芝軍敗之地」という記述があり、石国人の駐屯地であるとする。前述したように、当時の石国は黄姓突騎施と友好関係を結んでいた。そのため、タラスは黄姓突騎施の影響下にあったと考えられ、そこから東方に碎葉周辺までが黄姓と黒姓の係争地域となっていたのである。

以上のように、杜環が碎葉遠征によって見たのは、前年の可汗捕縛によってもなお衰えず、チュー平原を黒姓突騎施と争っていた黄姓突騎施の姿である。『経行記』には、「又有碎葉城、天寶七年、北庭節度使王正見薄伐、城壁

摧毀、邑居零落」という、王正見による碎葉城遠征の記述があるが、その遠征の目的も黒姓突騎施の支援のために黄姓突騎施を討伐することにあったとされる［前嶋一九八二a、九三頁］。とすれば、その時点で碎葉城は黄姓突騎施の勢力下にあったということだろう。七三九年の唐による黒姓突騎施討伐の際には、碎葉には蘇禄の子吐火仙がいて、黒姓突騎施の拠点のひとつとなっていたことからすれば、黒姓が唐の攻撃で痛手を受けた後、碎葉城を黄姓が奪取したが、黄姓が唐に背反したため、再び唐は碎葉遠征を強いられたと考えられるのである。

少なくとも七四八年段階で碎葉城が黄姓の拠点であり、七五一年段階で黄姓はなおもチュー平原をめぐる抗争を黒姓と繰り広げているという状況に鑑みれば、唐は七五〇年の可汗捕縛を経てもなお、黄姓突騎施に対する対応を念頭におかなければならなかったことだろう。そのように考えてはじめて、七五一年の高仙芝遠征軍の当初の目的地が碎葉であったことが腑に落ちる。それならば、その想定される対戦相手は、イスラーム勢力ではなく黄姓突騎施でなければならない。前年の石国討伐によって石国王子が背反したと見なした唐は、新興で唐との接触も少なかったイスラーム勢力ではなく、これまでも対応に悩まされてきており、さらに石国と友好関係にあった黄姓突騎施と戦闘になることを想定し、その重要拠点である碎葉への遠征を敢行したのである。

ところが、碎葉で戦闘は起こらなかった。王正見の遠征によって唐が建設した城壁が破壊されてしまった［柿沼二〇一九、五二―五三頁］ことに加え、そもそも、八世紀後半以降、西部天山地方の主導権は、突騎施からカルルクへと急速に移っていくため、この時点で突騎施は碎葉城に駐屯軍を置く余力を失っていたのかもしれない。いずれにせよ、戦闘は記録されていない。前掲の【史料二】『資治通鑑』［巻二一六「天宝十載夏条」（六九〇七―六九〇八頁）］

によれば、「諸胡皆怒、潛引大食欲共攻四鎮。仙芝聞之、將蕃・漢三萬衆擊大食、深入七百餘里、至恆羅斯城、與大食遇」という記述があって、高仙芝は「深入」してタラスに到達した旨が書かれていた。この記述は『旧唐書』巻一〇九「李嗣業伝」［三三九八頁］になると、「深入胡地」となっていて、唐の勢力圏を遠く離れた進軍だったことが分かる。高仙芝は、砕葉で想定された戦闘に遭遇しなかったために、功を焦ってかさらに進軍を続け、黄姓突騎施と友好関係にあった石国の駐屯地であるタラスまで進軍した結果、予想外にイスラーム勢力との戦闘に突入して敗北したと考えられるのである。

また、【史料二】によれば、高仙芝はイスラーム勢力が安西四鎮を攻撃しようとしていると聞き、タラス遠征を行ったとされるがそのまま信用するわけにはいかない。事実として、彼の出兵目的地は砕葉だったからである。深入りした上に敗戦したという過失を覆い隠すために、高仙芝が、ありもしない安西四鎮攻撃計画を察知したと偽りの証言をしたとしてもおかしくない。この点、Karev［2015, pp. 69–70］はイスラーム側には高仙芝の報告通り安西四鎮侵攻の意図があり、四鎮のうち砕葉鎮へ侵攻するためにタラスを確保しなければならなかったと推測する。イスラーム側に安西四鎮侵攻の意図があったとする説は大変興味深いものだが、事実だとしてもそれはあくまでイスラーム側の計画であり、唐側にその計画が察知されていたとは考えにくい。なぜなら、本稿で述べてきたとおり、唐はタラス河畔の戦いの三〇年以上前に当たる七一九（開元七）年に砕葉鎮を四鎮から除いており［松田一九七〇、三八四―三九一頁］、既に砕葉は唐の勢力圏内になかったからである。もし高仙芝が四鎮を守ろうとするならば、砕葉を目指すのは突出しすぎだろう。反面、石国にいるイスラーム勢力自体を叩くのであれば砕葉は手前過ぎる。結果、砕

葉遠征は意図が不明の遠征になってしまう。やはり、イスラーム勢力の意図と高仙芝の報告は切り離して考えるべきなのである。仮にカレフの推測通りだったとしても高仙芝が敗戦を虚偽の侵攻計画で覆い隠そうとして、偶然、イスラーム側の意図と重なったと考えるしかない。唐側の意図は、あくまで突騎施討伐であり、イスラーム勢力の意図とは別であった。両者の意図が錯綜した結果、歴史上の大きな偶然として、タラス河畔の戦いが発生したのである。

おわりに

以上の検討により、タラス河畔の戦いを引き起こすこととなった七五一年の高仙芝による遠征は、当初からタラスや、その先の石国を進軍目的地としていたわけではなく、対突騎施戦を想定して、碎葉を目的地とする「碎葉遠征」だったことが明らかとなった。しかし、碎葉まで至っても想定された黄姓突騎施との戦闘は起こらず、さらに深入りしてタラスまで進軍したために、イスラーム勢力と遭遇し、歴史に残るタラス河畔の戦いが引き起こされた。既に前嶋［一九八二a、一〇四頁］がその偶発性を指摘していたが、イスラーム勢力は高仙芝が戦闘を想定した相手ですらなく、全くの偶然だったことが明らかとなった。それゆえ、この遠征は、一般に考えられているような東西勢力の天王山というわけではなく、この敗戦によって唐王朝が中央アジアから撤退せざるをえなくなった、とも考えにくい。唐が中央アジアから手を引かざるを得なかったのは、この戦いの四年後に発生し、唐の屋台骨を揺るがした「安史の乱」（七五五―七六三）の影響であることはもはや贅言を要しない［森安二〇〇七、三四六―三四七頁］。[25]

とはいえ、タラス河畔の戦いがその後の歴史展開に何の影響も与えなかったわけでもない。李方［二〇〇六、六五頁］は、イスラーム勢力が中央アジアに確立され、反面、唐の勢力が中央アジアで劣勢になっていくに従って、唐と中央アジア諸国との関係が徐々に破綻し、高仙芝の石国遠征のような苛烈な対応にならざるを得なかったと指摘した。表面的には唐とイスラーム勢力との関係はほとんど見てとれないが、大きな流れの中で見れば唐が中央アジアをイスラーム勢力によってうばわれていく流れを決定的にしたのがタラス河畔の戦いであった。さらに、稲葉［二〇〇一、二六頁／Inaba 2010, pp. 49–50］が指摘しているように、まさにその安史の乱の際に中国に到来し、唐を援助したアラブ兵とは、援軍を求める唐の粛宗からフェルガナに対して出された徴発命令に基づき、当地に結集した反アッバース朝勢力を吸収した傭兵集団であった。稲葉は、フェルガナが直接徴発を受けたのは、タラス河畔の戦いを引き起こすこととなった、唐によるフェルガナ擁護と石国遠征への見返りであると推測する。すなわち、唐が中央アジア情勢に干渉したことで、中央アジアのイスラーム勢力を一部中国に引き込むこととなったのである。

このように、タラス河畔の戦いが後世に意味を持たないわけではない。しかしながら、本稿では、これまでの先行研究とは異なり、現代人の視点から離れ、同時代人の視点からタラス河畔の戦いを捉え直していることはこの際強調したい。結果的にタラス河畔の戦いを引き起こした遠征の目的地が碎葉であったという事実から浮かび上がるのは、突騎施に対する変わらぬ警戒感であり、唐側から見た場合の、イスラーム勢力に対する関心の薄さである。碎葉城を含むチュー平原は、安西四鎮を脅かした突騎施の全盛期とされる蘇禄が死去した後も、相変わらず突騎施の勢力圏であり、唐の頭を悩ます存在であった（ように見えた）。その存在感は、安西四鎮の勢力圏に直接影響を及

ぼしてこなかったイスラーム勢力とは、比べものにならないほど大きかった（ように見えた）はずである。

実際には突騎施は、七五四年にウイグルとの勢力争いに敗れアルタイ山脈から西部天山に移住してきたカルルクの興隆［川崎一九九三］により、その力を失っていくさなかであった。この後、八世紀後半以降にはイスラーム史料においても、カルルクが東方の隣人として扱われることとなり［Pritsak 1951, p. 279］、やがてはカラハン朝の建国へといたる。[26] このように、砕葉遠征時点での唐の警戒感とは裏腹に、突騎施とカルルクとの交代は急速に進んでいったのである。高仙芝にとって、本当に警戒すべきは斜陽の突騎施ではなくカルルクだったのかもしれないが、当時を生きる人々にとって、強者としての突騎施のイメージは簡単に拭えるものではなかったのだろう。まして、新興のイスラーム勢力がその後、大発展を遂げるなどとは、彼らには思いもよらなかったはずである。

突騎施の没落とイスラーム勢力の大いなる発展を知る後世の我々は、歴史の流れにミスリードされてきたと言えるだろう。長期的な流れに鑑みれば、確かに東西両勢力が一瞬だけ鞘を当てたタラス河畔の戦いに重要な意味を見いだすことは可能であるが、当時の人々にとっては大きな意味を持つ戦闘ではなかった。伝世史料に記述が少ないということが、何よりそれを雄弁に物語っている。この点、タラス河畔の戦いは、同時代人の持っていた感覚と、現代人の持つ歴史感覚とを、切り分けて考えるべき好例となるだろう。

参考文献

●漢籍版本

『吐文』＝唐長孺（主編）一九九二―一九九六：『吐魯番出土文書』一―四、文物出版社。
『資治通鑑』／『旧唐書』／『新唐書』／『通典』＝中華書局標点本。
『新獲』＝栄新江、他（編）二〇〇八『新獲吐魯番出土文献』中華書局。
『冊府元亀』（宋版・明版）＝中華書局影印本。

●欧文

Barthold, W. 1928: *Turkestan Down to the Mongol Invasion*. Gibb, H.A.R (tr.) 2nd ed., London.

Beckwith, C. 1987: *The Tibetan Empire in Central Asia: A History of the Struggle for Great Power among Tibetans, Turks, Arabs, and Chinese during the Early Middle Ages*. Princeton, Princeton University Press.

Dunlop, D. M. 1964: A New Source of Information on the Battle of Talas or Atlakh. *Ural-Altaische Jahrbücher* 36, pp. 326–330.

Gibb, H. A. R. 1923: *The Arab Conquests in Central Asia*. London. (Repr. New York, 1970)

Inaba, M. 2010: Arab Soldiers in China at the Time of the An-Shi Rebellion. *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* 68, pp. 35–61.

Karev, Y. 2015: La révolution ʻabbāsside et la politique d'Abū Muslim au Māwarā'annahr. *Samarqand et le Sughd à l'époque ʻabbāsside: Histoire politique et sociale*, Association pour l'avancement des études iraniennes, Paris, pp. 41–126.

Pritsak, O. 1951: Von den Karluk zu den Karachaniden. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 101, pp.

270–300.
Yoshida, Y. 2020: Studies of the Karabalgasun Inscription: Edition of the Sogdian Version. *Modern Asian Studies Review* 11, pp. 1–139.

●中文

畢波　二〇〇七「怛邏斯之戦和天威健児赴砕葉」『歴史研究』二〇〇七―二、一五―三一頁。
郝潤華　二〇〇一「関于柳芳的《唐暦》」『史学史研究』二〇〇一―二（一〇二）、六五―七二頁。
李方　二〇〇六「怛羅斯之戦与唐朝西域政策」『中国辺疆史地研究』一六―一、五六―六五頁。
銭伯泉　一九九一「従《張無価告身》論高仙芝征討石国和突騎施」『民族研究』一九九一―三。
孫暁林　一九九一「関于唐前期西州設〝館〟的考察」『魏晋南北朝隋唐史資料』一一、二五一―二六二頁。
厳耕望　一九八五『唐代交通図考（二）』中央研究院歴史語言研究所。
鄭旭東　二〇一九「唐郭曜及夫人王氏墓誌研究」『吐魯番学研究』二〇一九―一、五四―六三頁＋図版一頁。

●日文

荒川正晴　二〇一〇『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』名古屋大学出版会。
石川澄恵　二〇一三「唐初期の西方経営と西突厥阿史那氏について――阿史那懐道夫妻墓誌を手掛かりに――」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』一九、二五―四〇頁。
伊瀬仙太郎　一九五五『中国西域経営史研究』巌南堂書店。

稲葉穣　二〇〇一「安史の乱時に入唐したアラブ兵について」『国際文化研究』五、一六―三三頁。
――　二〇二二『イスラームの東・中華の西――七～八世紀の中央アジアを巡って――』（京大人文研東方学叢書一三）臨川書店。
柿沼陽平　二〇一九「唐代砕葉鎮史新探」『帝京大学文化財研究所研究報告』一八、四三―五九頁。
川崎浩孝　一九九三「カルルク西遷年代考――シネウス・タリアト両碑文の再検討による――」『内陸アジア言語の研究』八、九三―一一〇頁。
桑山正進（編）一九九八『慧超往五天竺國傳研究』臨川書店。
齊藤茂雄　二〇一三「突厥第二可汗国の内部対立――古チベット語文書（P.t.1283）にみえるブグチョル（'Bug-čhor）を手がかりに――」『史学雑誌』一二二―九、三六―六二頁。
――　二〇二一「砕葉とアクベシム――七世紀から八世紀前半における天山西部の歴史展開――（増訂版）」『帝京大学文化財研究所研究報告』二〇、六九―八三頁。
――　二〇二三「文献史料から見た砕葉城」『帝京大学文化財研究所研究報告』二一、二五―三七頁。
代田貴文　二〇〇一「カラ＝ハーン朝史研究の基本的諸問題」『中央大学附属高等学校　教育・研究』一五、一―三二頁。
ドゥ・ラ・ヴェシエール、エチエンヌ／影山悦子（訳）二〇一九『ソグド商人の歴史』岩波書店。
内藤みどり　一九八八『西突厥史の研究』早稲田大学出版部。

前嶋信次　一九八二a「タラス戦考」『民族・戦争――東西文化交流の諸相――』誠文堂新光社、四一―一二二頁。
――　一九八二b「杜環とアル・クーファ――中国古文献に現れた西アジア事情の研究――」『シルクロード史上の群像――東西文化交流の諸相――』誠文堂新光社、六一―七八頁。
松田壽男　一九七〇『古代天山の歴史地理学的研究（増補版）』早稲田大学出版部。
護雅夫　一九七六『古代遊牧帝国』（中公新書四三七）中央公論社。
森安孝夫　二〇〇七『シルクロードと唐帝国』（興亡の世界史第五巻）講談社。
――　二〇一五「吐蕃の中央アジア進出」『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋大学出版会、一三二―二二九頁。
森安孝夫・吉田豊　二〇一九「カラバルガスン碑文漢文版の新校訂と訳注」『内陸アジア言語の研究』三四、一―五九頁＋図版一頁。

註

（1）　中国史料では、『資治通鑑』「巻二一六「天寶十載夏条」（六九〇七―六九〇八頁）」と、新旧『唐書』「李嗣業伝」の情報が最も詳しい。西方史料では、Dunlop［1964］が紹介した九世紀のYa'qūb al-Fasawīの記述が時代も古く詳細であるが、こちらでは戦闘はヒジュラ暦一三四年Shawwāl月（七五二年四―五月）に発生したとされていて時期が合わず、戦闘が起こった場所もタラスではなくTalkh*（＝Atlah）であったとされている。

（2）　六四八年から六七九（調露元）年までの間に、碎葉と焉耆のどちらが安西四鎮に入っていたかは史料によって異動があり、多くの研究者は焉耆説を採っているが、内藤み

どり氏のみ砕葉説を採っている。両者の説については齊藤［二〇二一、七一頁］で紹介したので、そちらを参照のこと。

（3）砕葉とその周辺の歴史については、柿沼［二〇一九］、齊藤［二〇二一、二〇二三］を参照のこと。

（4）当該時期のイスラーム勢力とは具体的にはウマイヤ朝とアッバース朝であるが、本稿では両者の違いには立ち入らず、単にイスラーム勢力と呼称する。漢文で一貫して「大食」と呼称される勢力がこれに当たる。

（5）ここまでの記述は、Gibb 1923／Dunlop 1964／前嶋一九八二a／Beckwith 1987／ドゥ・ラ・ヴェシエール二〇一九などによる。

（6）十載、又從平石國、及破九國胡幷背叛突騎施、以跳盪加特進、兼本官。初、仙芝紿石國王約爲和好、乃將兵襲破之、殺其老弱、虜其丁壯、取金寶瑟瑟駝馬等、國人號哭、因掠石國王東獻之于闕下。

（7）竭師がどこに当たるかは諸説あるが、チトラルに当てる説を採る。森安［二〇一五、一八一、二一七頁、注二〇四］参照。

（8）高仙芝之虜石國王也、石國王子逃詣諸胡、具告仙芝欺誘貪暴之狀。諸胡皆怒、潛引大食欲共攻四鎮。仙芝聞之、將蕃・漢三萬衆擊大食、〔『考異』曰、馬宇『段秀實別傳』云「蕃・漢六萬眾」、今從『唐曆』。〕深入七百餘里、至恆羅斯城、與大食遇。相持五日、葛羅祿部衆叛、與大食夾攻唐軍、仙芝大敗、士卒死亡略盡、所餘纔數千人。

（9）イスラーム勢力の状況として、カレフ［Karev 2015, pp. 69–70］は、この時アブー＝ムスリム Abū Muslim の命令を受けたサイード＝ブン＝フマイド Sa'īd b. Ḥumayd が援軍にやって来たが、それは石国王子を伴って石国を平定し、当地にイスラーム勢力を再確立するためだったと指摘している。

（10）現在、タラスの名を持つ都市は、タラス河をはさんでカザフスタン側とキルギス側にそれぞれ存在している。稲葉［二〇二二、一五〇頁］は、両者の間、「タラス河の河谷がある程度開けていて野戦が可能な場所」で会戦が行われたと推測している。

（11）一般的には葱嶺とはパミール高原のことだが、ここでは、唐の最西端の軍事拠点があったタシュクルガンの葱嶺守捉［伊瀬一九五五、三三七―三三八頁］を指すと考えられる。この点は、大阪大学名誉教授の森安孝夫氏よりご指摘いただいた。

（12）杜環『經行記』云、「其國城一名赭支、一名大宛。天寶

中、鎮西節度使高仙芝擒其王及妻子歸京師。國中有二水、一名眞珠河、一名質河、並西北流。土地平敞、多果實、出好犬・良馬」。又云、「碎葉國。（a）從安西西北千餘里有勃達嶺、嶺南是大唐北界、嶺北是突騎施南界。西南至葱嶺二千餘里。其水嶺南流者盡過中國、而歸東海。嶺北流者盡經胡境、而入北海。又北行數日、度雪海。其海在山中、春夏常雨雪、故曰雪海。中有細道、道傍往往有水孔、嵌空萬仞、轉墮者莫知所在。勃達嶺北行千餘里至碎葉川。其川東頭有熱海、茲地寒而不凍、故曰熱海。又有碎葉城、天寶七年、北庭節度使王正見薄伐、城壁摧毀、邑居零落。昔交河公主所居止之處、建大雲寺、猶存。其川西接石國、約長千餘里。（b）川中有異姓部落、有異姓突厥、各有兵馬數萬。城堡閒雜、日尋干戈、凡是農人皆擐甲冑、專相虜掠以爲奴婢。（c）其川西頭有城、名曰怛羅斯、石國人鎮、卽天寶十年高仙芝軍敗之地。從此至西海以來、自三月至九月、天無雲雨、皆以雪水種田。宜大麥・小麥・稻禾・豌豆・畢豆。飲蒲萄酒・麋酒・醋乳」。

(13) 西州管轄下にあった館で、西州から焉耆に向かう幹線路上にあった［厳耕望一九八五、四六四頁］。八世紀以降、西州管内では軍事支配の強化とともに駅道制度が廃絶に向かったため、宿泊施設である館が幹線道路沿いに完備されていった［荒川二〇一〇、三三〇頁］

(14) 「唐天寶十三載（七五四）礌石館具七至閏十一月帖馬食歴上郡長行坊状」［『吐文』四、四四七―四五八頁］の一九一行目に現れる「捉館官許獻芝」と同一人物とされる［畢波二〇〇七、二五頁］。捉館官は館の主催者［孫曉林一九九一、二五四―二五五頁］である。

(15) 天威は『新唐書』巻四〇「地理志四 隴右道鄯州鄯城県条」［一〇四一頁］に現れる天威軍の略称である［畢波二〇〇七、二五―二六頁］。

(16) 郭子儀の長男が曜であることは、『旧唐書』巻一二〇「郭子儀伝」［三四六六頁］に、「子曜・旰・晞・晅・晤・曖・曙・映等八人、婿七人、皆朝廷重官（息子の曜・旰・晞・晅・晤・曖・曙・映の八人、娘婿の七人は、みな朝廷の要職に就く官僚であった）」とされていることからも確認できる。

(17) 天寶初、戎帥張大賓・高仙芝咸辟爲軍鋒、從事破斬啜・突騎施、開勃律・碎葉。

(18) 張大賓の名は漢籍に現れないものの、鄭旭東［二〇一九、六〇頁］は、七三五（開元二十三）年前後に天山軍使・西州刺史であった「張待賓」であると推測する。

(19) 「高仙芝伝」［三二〇五頁］では「四鎮節度使」とされ

るが、『旧唐書』巻一〇四「封常清伝」［三二〇七頁］では「安西節度使」とされる。

(20) 「斬啜」とは、齊藤［二〇一三］で論じた「ブグチョル集団」と関わりがあるものと思われるが、本稿の主題を大きく外れるため、別稿で論じたい。

(21) 都摩支又背達干、立蘇祿子吐火仙骨啜爲可汗、居碎葉城、引黑姓可汗爾微特勒保怛邏斯城、共擊達干。帝使磧西節度使蓋嘉運和撫突騎施・拔汗那西方諸國。莫賀達干與嘉運率石王莫賀咄吐屯・史王斯謹提共擊蘇祿子、破之碎葉城。吐火仙棄旗走、禽之幷其弟葉護頓阿波。疏勒鎮守使夫蒙靈詧挾鋭兵與拔汗那王掩怛邏斯城、斬黑姓可汗與其弟撥斯、入曳建城、收交河公主及蘇祿可敦・爾微可敦而還。又料西國散亡數萬人、悉與拔汗那王。諸國皆降。

(22) 有男曰昕。幼而敦敏、長而獨立、以左領軍衛將軍襲號可汗。

(23) 前嶋［一九二八a、九一―九二頁］は「三姓葉護」の都摩支が「骨咄祿毗伽都摩度闕俟斤」と呼ばれており、「十姓可汗」の伊里底密施骨咄祿毗伽可汗と「骨咄祿毗伽」という称号で共通していることから、両者は同一人物であると推測した。しかし、内藤［一九八八、九三―九四頁］は、都摩支が三姓葉護に冊立された後である七四三（天宝二）年に「黑姓可汗骨咄祿毗伽」が来貢しているが、都摩支だとすると唐に与えられた称号である「三姓葉護」を名乗らず、自称である「黑姓可汗」を名乗って入貢したことになり、到底あり得ないことを指摘して前嶋説を批判した。内藤氏の批判は当を得たものと思われるので、本稿では両者は別人と扱っている。

(24) この三部族が何を指すか明確ではない。しかし、『新唐書』［巻四三下「地理志七」（一一三〇頁）］によると、嗢鹿州都督府が置かれた突騎施索葛莫賀部と、潔山都督府が置かれた突騎施阿利施部とがあり、突騎施の二部族が確認できる。そして、黄姓の烏質勒は嗢鹿州都督であった［『冊府元亀』巻九六七「外臣部継襲篇二」（宋版、三八二八頁／明版、一一三七二頁）］ことから索葛莫賀部出身とわかる［cf. 内藤一九八八、三一六頁］。索葛莫賀部が黄姓・黒姓に分かれているともし仮定すれば、それに阿利施部を加えて三姓と考えることが可能である。この点は、帝京大学文化財研究所客員教授の吉田豊氏よりご指摘いただいた。

(25) カレフ［Karev 2015, p. 68］は、タラス河畔の戦いのきっかけとなった、高仙芝による七五〇年の石国遠征があまりに苛烈であったために、中央アジアの諸国に唐に対する不信感が植え付けられ、中国と中央アジアの関係におけ

る転換点となった、とするが、そもそもその後、両者は接触する機会がなかったのである。

(26) カラハン朝の建国については八四〇年説や九四〇年説があり、決着を見ていない［cf. 代田二〇〇一］。その建国者の出自についても諸説があるが、主要四部族のうちにカルルクが含まれていることは確実なようである［代田二〇〇一、一八頁］。

（帝京大学文化財研究所講師）

［付記］本稿は、基盤研究（S）（JSPS科研費21H04984）の助成を受け、二〇二二年一月二三日に開催された「シルクロード学研究会二〇二二冬」（帝京大学文化財研究所主催・オンライン）で口頭報告した内容に基づいている。

the Northern Qi dynasty, had not practiced the levirate custom was favorable for the *Weishu*.

The *Tongdian* emphasized that levirate was a northern barbarian custom, and used the derogatory terms *zheng* 蒸 and *bao* 報 to refer to it. This style of description had previously appeared in the various texts compiled during the early Tang dynasty, and the *Tongdian* utilized it thoroughly. The *Weishu*'s assertion that the northern barbarian Gaoche did not practice the levirate was inconsistent with this policy of description, and thus Du You erased this record from the *Tongdian*. Du You's active use of this strategy stemmed from his foreign policy of preventing the advancement of barbarians into China. By comparing the "ancient Chinese" to "modern barbarians," he aimed to assert the immutability of barbarians, and there was a clear distinction between the Chinese and the barbarians in this assertion. The descriptions of levirate in the *Tongdian* reinforced Du You's claim that the Chinese are distinct from the barbarians.

Battle of Talas and Suiye: Unravelling the True Purpose of Tang Dynasty's Military Campaign

SAITO Shigeo

This paper explores the historical development leading up to the Battle of Talas, which took place in 751 between the Tang Dynasty and Islamic forces. While some studies have long regarded the battle as an important clash in world history, others have argued that it was a serendipitous encounter with little impact on subsequent historical developments. This paper discusses the historical significance of the battle, starting from examining the motive of the Tang army, which was led by Gao Xianzhi 高仙芝 to the banks of the Talas River.

First, Chapter 1 discusses the context of Central Asian history leading

up to the Battle of Talas. The Shāsh (Shiguo 石國), patronised by the Turkic nomadic Huangsheng Türgiš (Huangxing Tuqishi 黃姓突騎施), found themselves in conflict with the Tang. The Shāsh's defection from the Tang during their conflict with Fergana prompted Gao Xianzhi's military expedition and eventually led to the outbreak of the Battle of Talas.

In Chapter 2, two historical documents are examined: the newly discovered Turfan document dating back to 751 (2006TZJI:026) and the Epitaph of Guo Yao 郭曜 from 783. Both documents record the departure of Gao Xianzhi's army for the Battle of Talas. Remarkably, they mention Suiye 碎葉 (Sūyāb, now the site of Ak-Beshim) as the initial destination before Talas. This is in line with the records of Du Huan 杜環, which provide more details about Suiye than the Battle of Talas itself. Thus, it is clear that the initial destination of Gao Xianzhi's army was not Talas but Suiye.

In Chapter 3, it is pointed out that the Huangsheng Türgiš had a strong presence in Central Asia at the time. The Gao Xianzhi's army, following the defection of Shāsh, assumed that it would engage in battle with the Huangsheng Türgiš rather than the emergent Islamic forces, and set out for Suiye.

The examination conducted by this paper reveals that Gao Xianzhi's expedition, which resulted in the Battle of Talas, did not intend to target the Islamic forces; the engagement between the two factions was purely coincidental.

The Northern Song of Kaifeng's *Shangyuan Guandeng* and the Capital Residents

MATSUDA Ryo

In previous studies on the Northern Song dynasty in the capital of Kaifeng 開封, although it has been pointed out that the transformation of the capital space was related to the background of each period, the changes in the